

## 石造物調査によせて

調査協力員 古屋高治

今回古文書から石造物に至るまで、尊い体験で、今迄余り関心を持つていなかつた石造物にも注意するようになったことを有難く思つてゐる。

石地蔵、道祖神、庚申塔、馬頭観音等多種に亘る石造物は長い伝統と、厚い信仰のもとに守り続けられている。特に道祖神のお祭りに獅子舞をすることは共通しているが、横根、西高橋、塚原に就いては差があり、郷土研究にも得る処があつた。また大きな碑文には、現在使われていない文字があつたり、風化して読むことに悩んだり、真夏日を蚊に攻められ乍ら調べていると近所の人が蚊取線香を持って来てくれたこともある。銘文を見てこの偉大な石に、

どんな道具を使用したのかと思い乍ら碑石を計り写真を撮る。石鳥居の調査は又馴れない高所を計るのにも苦心が伴う。兎にも角にも、

あれ!! 素人の私も石造物に博学となつた氣分である。石造物よ、永遠に幸

### (市史編さんを終えて)

調査協力員 山岡正夫

民族の伝承学が吾が国でも青年期に入り、その研究に専念する人が多くなつて來た。市町村や個人でも史料館を設立し、市町村史の刊行も多くみられる。然し社会情勢は旧来の習俗湮滅に加速度を加えてゐる。

特に農村地帯では過疎の防止と産業の発展と企業誘致のため道路

の改修、敷地造成が毎年加速されて、文化史上貴重な遺跡が破壊されて、祖先が生きて來た信仰と生活の歴史と郷愁である石造物など平凡な石塊の如く取りかたづけられ破壊されていて、市史編さんに当り資料の調査、収集はまことに困難であつた。

天災地変が自然の現象であるとの知識がなく神仏や惡魔の祟りと信じ、庚申塔、山の神、水の神、風の神、道祖神、其他数えきれない信仰の象徴を細密に調査する度、貧苦に生き絶え、子孫のために生きて來た祖先を偲び敬虔な涙であつた。甲府市史は世界屈指の経済大国になつた吾国に生きてゆく人達に先祖崇敬と愛市の指針になることを信じて止まない。

## 石造物調査の思い出

調査協力員 金丸平甫

ふとした切つ掛けから甲府の住民でもないのに、市の石造物調査の協力員に委嘱されてから、もうかれこれ四年以上にもなる。

以前から県内の歴史的な遺跡を見て歩くことは好きであったが、特に石造物を研究したことなどはなかつたので、始めのうちは調査方法などで戸惑つたが、試行錯誤を繰り返しながらだんだんと興味を持つようになつて來た。

調査の過程ではいろいろ珍しい石造物に出会つたが、以下に述べるものその一つ。

相生三丁目の光沢寺墓地の南隅にある無縁墓地の中央に、高さ一米七〇釐程の石碑が立つていて、正面中央の框彫りの中に「行路病入合葬墓」と刻み、下部に「行路病舎看守人・勲八等 福島高吉建

立・明治四十二年三月彼岸」と三行に刻まれている。

墓石の前に埋葬施設があり、墓前にはま新しい生花が上げられていました。

### （市史編さんを終えて）

（市史編さんを終えて）

調査協力員 篠原武芳

甲府市では市制百周年記念として市史の刊行に当り、調査協力員として石造物の調査に参加致しました。私は塩部一丁目（現在緑が丘一丁目）塩部派出所東入り神明神社の境内に甲府代官中井清太夫の顕彰碑があり調査をしました。中井清太夫の祠並びに顕彰碑は私が調査をした中で特に印象に残った石造物であります。

此の碑文は塩部郷土史によると「天明改年辛丑秋八月日王泉院良海円朝護記」「神明神社崇敬者後裔米園書昭和三十九年三月二十日神明神社拝殿再建築委員建之同町石工業小林勇刻」と有ります。町の役員の方が神社の奥裏にある中井清太夫を祀った石の祠を案内して下さいました。祠は高さ五一センチメートル笠幅四六センチメートル笠奥行六五センチメートル、年代は不明ですが天明年間の祠だと思います。

中井清太夫が神として祀られたのは塩部郷の農民の願いを聞き農民のために尽されたからです。当時の農民の苦難は並大抵ではなかつたと思われます。

石造物によって昔の人々が生活の中に今も生かし次の世代に伝えた郷土の歩みを、そして生活の変遷を思いうかべることができ、昔

からの歴史的文化遺産を末永く伝えたいと思ひます。

調査協力員 斎藤紳悟

甲府市史編さん事業とのかかわりは、昭和五十八年五月からあります。前年度中にすでに嘱託職員として勤務することが決まっており、当時の市長であった河口親賀氏と同席したとき斎藤典男先生にこの旨紹介され、「よろしく頼むよ」と激励されたのを覚えています。勤務を真近に控えた四月二十六日第一子長男が誕生した。初出勤は若松町の佐々木産婦人科からであった。この子もすでに小学三年生この四月には四年生になる。これを頭に四人の子持ちになってしまった。まさに「十年一日の如く」である。嘱託勤務は二年十一ヶ月、この間古文書の調査、解説、整理を専らとした。退職後も執筆や調査協力員として編さん事業と関わり現在に至っているのだが、もちろんこれらは私の実力や実績とは不似合の遭遇であろうと受け止めている。関係諸兄の親心と有難く思っている。

これとは別に、金銭を代償しなければならないという、およそそれまで味わつたことのない生活も経験することができた。辛い反面これは面白かった。いまではこの話、古文書などの講座を受け持つと一番最初にするのが私のならわしとなっている。

顧みるに私の知る編さん事業では、人と人との心の触れ合い、特に編さん事業への情熱を何よりもし、これを根幹としてきた。多くの出会いがありそれ自体が市史編さん事業であったといえ、一般的には評価の対象外にならうが事務局の大変苦労した点であり、私な